

Title	『閒情偶寄』考(二)
Sub Title	A study on Xian-qing Ou-ji (1)
Author	岡, 晴夫(Oka, Haruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.23- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0023">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0023</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 『閒情偶寄』考 (二)

岡 晴 夫

前稿では李漁の戯曲論、すなわち『閒情偶寄』全八部の初めに掲げる「詞曲部」および「演習部」について述べてみた。この二部に続くのが「声容部」であるが、本稿では以下これを中心に取り挙げてみる。

「声容部」は好色な快樂主義者として名にし負う笠翁が、女性に関する事柄についてその得意とする「遊戯の筆」を存分にふるってみせたもので、彼自身『閒情偶寄』はまずこの部分から読み始めれば面白いと人にも奨めているのである。<sup>(1)</sup>従って、なるほどその「面白い」箇所に対して与えられた眉批の数も全部で二十二、相対的にみて他の部よりもこの「声容部」が最も多いことになる。「詞曲部」「演習部」の二部は表面上はあくまでも戯曲論としての体裁をとっているのだから、ここでは「遊戯の筆」のあやつりようもある程度は控え目・抑え気味にせざるを得なかったと言えよう。その点「声容部」においては、より自在にかつ容易に持ち前の本領を發揮することができたのは当然であつたろう。

つまりこれを一口にして括るならば「女性美論」とでも呼ぶほかあるまいが、あたかも「戯曲論」がごく普通の意味

でのまじめ真当なる戯曲論ではなかつたように、こちらも同様、まじめ真当なる女性美論などでは断じてない。もともとが「聞かなる情を偶々寄せ」て綴つた「閒話」、しかも好色の対象としての女性に関する事柄は笠翁得意の分野でもあつたから、その基本が戯れ文たる性格は、よりいっそう顯著濃厚になつてゐるのである。

—

「声容部」は全体が「選姿」「修容（身づくろい）」「治服（服飾）」「習技（稽古事）」の四つの章から成る。各章がさらに幾つかの項目に分れてゐるが、女性の容姿魅力についての見分け方・選別法を説くのが「選姿第一」である。まずその最初の項で「肌膚」を論じているところを取り挙げてみよう。ここで笠翁は、女性の肌膚は色白であるのが一番だが、これを得るのが難しい、およそ物の色といふのはすべて根本の色いかによるのだという「根本説」なるものを展開して、次のように切り出す。

人の根本は維れ何ぞや。精なり、血なり。精の色は白を帯び、血は則ち紅にして紫なり。多く父の精を受けて胎を成す者は、その人の生るるや必ず白。父精母血、交も聚りて胎を成すに、或ひは血多くして精少なき者は、その人の生るるや必ず黑白の間に在り。

笠翁がこだわるのは「新寄」の二字であつた。常に人の意表に出んとして奇妙な才気をひけらかし、往々にしてうざん臭い言辞を弄するが、それにしてもこれは実にかがわしい、眉唾なまやかしの理屈論理である。これを、なるほどその通りだと納得し感心する人がもしいるとすれば、きわめてありきたりの常識に欠けているか、あるいはこれが当時の常識だつたのだとして納得する余りにも、単純素樸に過ぎる人のいづれかであろう。ともあれこの論理のどこがどのよ

うにまやかして眉唾かということや、もしも遂一理詰めで論難しようと思えば、もちろんできぬわけではないが、それをまじめに試みるとすること自体、愚の骨頂・烏澁の沙汰を言うべきなのだ。なぜならばそもそも筆者笠翁自身が、ここで客観的に抛り所のある然るべきまじめ真当なる論議を展開しようと思図しているわけでは毛頭ないということである。むしろ逆に、まとも真当を装いながらも全く根拠も何もない甚だ得手勝手なむりこじつけの理屈を、自分の都合のいいように自由自在にこねくり回して遊んでみせようとしているに過ぎない。が実は、作者の手腕力量のほどは、それをいかに巧みにこねくり回しひねくり回して遊んでみせるかという点にこそあるのだ。そうした理屈のこねっぶり・ひねくりっぶり・遊びっぶりというものがあつて、そこがほかならぬこの種の文章（遊戯の筆・戯れ文）の見せ所であると同時に、取りも直さず笠翁の文章上の「芸」の見せ所でもあるということなのである。

ここでの笠翁の「根本説」なるものは、以下次のような展開を見せるのだが、まさに右に述べた如き観点に立つて、そのしたたかな曲者戯作者の言語遊戯における「芸才」お手並のほどを、とくと拝見すべきであろう。

その血は浅紅、結びて胎を成すが若きは、黒白の間にあるといへども、その生るるに及びてはてな贅ぜいふに美食を以てし、  
處ところくに曲房（密室）を以てせば、なほ日に淡に趨るべし。脚地（素地）のいまだく細こならざるを以てなり。幼時は白からざるも、長じて始めて白き者あるは、この類ひ是なり。その血色は深紫、結びて胎を成すに至りては、則ちその根本すでに緇く、全く脚地の漂すべき無ければ、その生るるに及ぶや、たとひ服するに水晶雲母を以てし、居るに玉殿瓊樓を以てするも、またその深きより変じて浅くなるを望み難し。ただよく旧を守りて遷うつさず、愈い々い老いて愈々黒きを致いたさずんば、また幸ひと云いふふ矣や。富貴の家に生れて白からず、長ずるに至り老ゆるに至りてまたかくの若き者有るは、この類ひこれなり。

こういう文章に相い対する際に至極厄介なのは、個々の読者の有する「感覺」の問題にわたることである。笠翁の文芸を論議の対象とする際の困難さ・しんどさは、実にこの点にこそある。こうした「戯れ文」の見せ所であるツボを押えて、作者がこねくり回して縷々展開して見せるその理屈のこねっぷりと、そこにおいて發揮してみせる「芸才」そのものとを、果して可笑しがり面白がることができるかどうか、それについては読解力の有無とは別個の、ある種の「感覺」が絶対不可欠なのであって、その不可欠のものに欠けてはどうしようもないのである。たびたび指摘してきたように、その面白さがわからぬ朴念仁はこれを術中にはめんとする底意地の悪さをも藏しているのが、戯れ文というものなのだ。研究者と呼ばれる人びとは、得てして真正面からまじめまともに取りかかろうとするから、まんまとその術中に陥ることになる。戯れ文を戯れ文として認識することすらできないのであるから、こうした文章への対応のしかたや評価という問題になると、それこそおよそ考えも及ばぬことになってしまう。

笹川臨風氏は笠翁の右の部分を用紹介してのち、「其根本説は頗る奇にして採るに足らず」と、あっさり評定された。<sup>(2)</sup>まことにお説ごもつともで、「頗る奇にして採るに足らぬことを述べている点において些かの疑いの余地はない。しかしながら、これはまさしくその「採るに足らぬ」というほかない無内容デタラメな、従っておよそ実のない「頗る奇」妙キテレッツな論議、それをまたさももつともらしく展開してみせたものなのである。だからマジメに見えていかがわしい、そこに生まれる「可笑しさ面白さ」。こそが大事の眼目なのであるし、そうした可笑しさ面白さをひねり出してみせた作者の手腕・修辭技術をも同時に見つけ評価するのだけければ、決して正鵠を射た論評にはならぬということなのである。つまり、筆者が腕にヨリをかけて殊さらバカバカしいことを言ってみせているのに、こいつはバカバカしいとして一蹴するのは、見当ちがいが甚だしいということなのだ。笹川氏の論評はしかし私にはまだよく理解でき

る。文字通り理解を絶するのは、「頗る奇にして採るに足ら」ぬことを述べているのだということさえわからない人が、少なくともということなのである。<sup>(3)</sup>

笠翁の文章に眉批を与えている文人仲間たちは、彼のそうした「戯れ」を大いに可笑しがり面白がる人びとであった。だから彼らは、しばしば勘所をおさえた絶妙とも言うべき「掛け声」を発しているのである。ここでの掛け声もまさしくそれである。

周彬若云く、此れ等の妙論、何處より得来れるやを知らず。予向に都門<sup>みやこ</sup>に在りしとき、人訊ふ南方に異人有りや否やと。予は笠翁を以て対ふ。又訊ふ怪物有りや否やと。予はまた笠翁を以て対ふ。試みに此の書を読まば、即ち予が言の謬りならざるを知らん。

「異人」とは、人並みすぐれた特異な才能の持主のこと。<sup>(4)</sup>「怪物」はここでは説明不可能な怪しげで風変わりなる人物といたったほどの意味で、後に述べるが「態度」の項で笠翁自身が使用したことばをここに逆用しているのである。――

「異人」ならざる常人には全く思いも及ばぬ「根本説」の「妙論」は、「異人」「怪物」たる笠翁をおいてほかに誰が吐けるものでもない（だからこそ「何処より得来れるやを知らず」なのである）。この書を読めばそれが納得了解できよう、と大いに感嘆してみせているわけだ。「根本説」に対する論評としては、まことに要を得て妙と言うべきであろう。

## 二

右の議論のすぐ後に続けて笠翁は、「此を知れば、則ち选材の法を知る、まさに染匠の衣を受くるがごとくなるべし」として、いよいよ伎倆の冴えを發揮しようとするが、その最初に言う「此」とは、先の「根本説」を指しているのはい

うまでもない。が果して、このような根も葉もない戯れの説を知ったところで、果して本当に女性の肌膚の素材を選別する方法がわかるものであろうか。まずはそれをこう断言して、みせている、胡散臭さと、その胡散臭さのもつ面白さ感が取られるかどうかが問題であらう。しかもそれは、ちょうど染色工が仕事を引受けるのと同じだとする。つまり衣服に付着した色の濃淡によって、職人の側では「漂白し易いかし難いか」の別があるのだと言う。ところが、色白であるのをよしする女性の肌膚の選別法と、衣服の漂白の難易度の問題とは、一見似ているように錯覚させられるものの特に関係あるわけでも何でもない。巧みな譬喩の導入によって殊さら問題の焦点をずらして紛わしくしているにすぎないが、実はこれは、以下に述べんとする戯れ文本题に対して張った用意周到なる伏線となっているのである。

婦人の白き者は相し易く、黒き者もまた相し易し。ただ黒白の間に在る者は、これを相するに易からず。三法あり。面の身かほからだより黒き者は白くし易く、身の面より黒き者は白くし難し。肌膚の黒くして嫩き者は白くし易く、黒くして粗なる者は白くし難し。皮肉の黒くして寛なる者は白くし易く、黒くして緊かつ実なる者は白くし難し。

ここで笠翁は、肌の白い者と黒い者は選別し易いが、中間の者は選別し易くないと言い、そこには「有三法焉」という。問題はその「三つの方法」である。——(一)「面と身」の色の違いによって、(二)「肌膚」の色と質(嫩・粗)の違いによって、(三)「皮肉」の色と質(寛・緊・実)の違いによって、それぞれ「白くし易い」か「白くし難い」かの別があるのだとする。つまり本来問題としていたのは「肌膚の選別方法」であつた。それがここに至って「白くし易いか・し難いか(易白・難白)」という別問題にずらされ、すり換えられてしまっているのである。先に染色工の漂白について述べておいた意味も、ここで瞭然としよう。つまり論理をすり換えるための伏線だったというわけだ。筆者笠翁の「狡獪の伎倆」による「仕掛け」の狙い所がまずここにある。しかも、極力簡潔早口にさらりと述べた右の部分が、実はここ

での議論（戯れ文）のいわば「結論」なのであって、以下はこの「三法」のそれぞれについて、何ゆえそのように結論し得るかという理由を縷々弁立てていくことになる。

しかし繰り返して言え、右の「結論」なるもの、さらりと読めば或いは何となくそれらしい気分にはさせられるかも知れないが、実はなんら客観的合理的根拠をもたぬ、全くいい気度で出まかせ上っ面の極言極論でしかない。例えば「三法」はさておくとして、まず「婦人之白者易相、黒者亦易相、惟在黑白之間者、相之不易」と断言したそれぞれの根拠は何なのか、なぜこう断言できるのかについての説明は、一切抜きでどこにもない。読み手の側がこれをもっとものように錯覚させられるとすれば、その巧妙なレトリックのワナに嵌まるからであろう。相手側が大まじめめかして一点の疑いの余地もないように、ズバリズバリと畳みかけるように断言してゆくスピードと勢いのよさ——その面白さを感じ得賞味すべきであるが——にうっかり吞まれ乗せられてしまうからに違いない。そこが筆者にとつては思うツボだから、そういう吞まれ乗せられがちな手合は、こいつをひとつここで嵌めてやろうと、ことさら狙いすましたところなのだ。

そして次には以下「三法」について「論証」してゆくわけであるが、これがまた当然ながら全く得手勝手で頼るいい気な理屈のこね回し・ひねくり回しであることは、初めにも述べた通りである。ただそこにおいて笠翁が外していないのは、先の「結論」の筆致の勢いの後を受けて、およそ二百八十言に及ぶ口舌をふるい、次から次へと畳みかけるように「断言」していくスピード感である。

(一)面の身より黒き者は、面外に在りて身内に在るに以り、外に在れば則ち風に吹かれ日に晒さること有り、その漸たゞいに白くなるや難しとなす。身衣中に在り、面に較べ稍ま白ければ、則ち……その験かまた是の若し矣、故に白くし易し。身の面より黒き者は此に反す、故に白くし易からず。(二)肌膚の細にして嫩わかかき者、綾羅紗絹あやしろしやぬいの如く、その体は

光滑、故に色を受くること易く、色を退るもまた易く、稍風に吹かるるを受け、略日に照らさるるを經なば、則ち深き者は浅くして濃き者は淡し矣。粗なれば則ち布の如く毯の如く、その色を受くるの難きは、綾羅紗絹に十倍す、……故に嫩かき者は白くし易く、粗なる者は白くし難きを知る。(二)皮肉の黒くして寛なる者は、なほ紬緞のいまだ熨を経ざる、靴と履のいまだ植を經ざる者のごとく、その皺よりていまだ直ならざるに因りて、故浅き者は深きに似、淡き者は濃きに似るも、一たび熨・植を經るの後は、則ち紋理陡ち變じ、また曩時の色相に非ず矣。肌膚の寛なる者は……則ちその血肉充滿するの後は必ず此の若くならず。故に寛なる者は白くし易く、緊にして実なる者は白くし難きを知る。肌を相するの法、此に備はれり矣。

もともとここで「結論」としていた「三法」なるもの自体が、「戯れ」の虚言であつた。だからその上に立つて何をどのように言おうとも、所詮はそうした「戯れ」の上塗り・虚言の積み重ねをしているに過ぎないことになる。右の文章においても、ただ目立つのは相手が納得しようがしまいが一切おかまいなしで、単に自分の理屈を都合よく運んで行って次々に断言を重ねる強引さである。つまりは「むりこじつけのおかしみ」を「命」とする言語遊戯に他ならないわけであるが、表面上は一見あくまでも見事きれいに辻つまを合せている。がしかし、これをそのまますなおに何の疑いもなく真に受けてしまふか、或いは、これらすべてが「戯れ」に発する理屈のもて遊びやら言いくるめ、つまりは虚言の積み重ねの饒舌であることをいち早く察知して、そうした筆者の饒舌そのものを可笑しがり面白がることのできるかどうか——そこを分けるのがやはり読み手の側の「感覺」の問題であるとしか言いがたい。

この文中に便宜上付した(一)(二)(三)のうち、特に(二)(三)においては譬喩をもち出してもっともらしく見せかける、そうしたレトリックの巧妙さも見逃すことができない。巧みな譬喩による弁論術は、古来中国人の得意とするところであるが、

曲者笠翁がこれによるトリックを利用駆使せぬ筈がない。(二)よりも(三)に一層多く用いているのも、実は読み手の側をより一層攪乱しようとする魂胆から出たもので、大いに意のあるところなのだ。しかも笠翁は、ここでの議論の結末を「相肌之法、備乎此矣」と言つて締めくくつているのである。「相肌之法」ではなくて「易白」か「難白」かという問題にすり換えるという詐術を弄し、縷々延々これについて饒舌そのものの虚言を列ね「相肌之法」には全くふれずにおきながら、またヌケヌケと口を拭つてこのように言い切つてみせる。——いったいこれはまた何という手がこんでふざけたいかさま・ペテンではなからうか。だからそこをしつかり見抜いて、そうした言語による見事あざやかなる遊びっぷりを可笑しがり面白がりながらも、同時にそのレトリックの巧妙さに内心舌を捲かずにいられぬ者は、こういう「掛け声」をかけてみたくなるわけである。

余澹心云く、此の種の議論、石破天驚に幾し。笠翁はその身に藕絲を藏して口は滄海を翻す者乎？

まことにこれは、ほとんど奇想天外ともいふべき堂々たる議論である。いったい笠翁なる人物は、尽きることなく繰り出される蓮根の糸のごとき豊饒なる弁舌、それをもつてかの大海原をも引っくり返すほどの大法螺だつて吹くことができる者ではなからうか？

### 三

先の「根本説」に対する眉批のなかで使われた「怪物」ということは、これは「選姿第一・態度」の項に見えるものである。往々にして本文中の笠翁自身の用語を逆にとらえて「掛け声」とすることがあるが、こうしたところにも笠翁と評者たちとの間のお互いにツーカーの遊び感覚・戯れ気分を見ることができるのであろう。

ここでは「尤物」と呼ばれるすぐれた美貌の女性に欠くことができないのは「媚態」であると言う。その「媚態」とは何か。

これ無形の物にて、有形の物に非ざるなり。惟だ其のこれ物にして物に非ず、形なきも形あるに似る、ここにて名けて尤物となす。尤物なる者は怪物なり。解説すべからざるの事なり。

ここに謂う「怪物」とは、本来の字義通り「あやしいもの、妖怪」を指すであらう。ここからさらに「行動性情の測りにくい、力量のすぐれた人物」（大漢和辞典）を意味することばにもなる。前述の眉批では、この意味にも絡ませて用いているのである。

右の文章に続けて、男子が一目見ただけで命をかけようと思わせるほどの美人は、「皆怪物也、不可解説之事也」だと繰り返してから、さらにこう言う。

われ「態」の一字において、天地の人を生ずるの巧、鬼神の物を体するの工に服す。われを以て天地鬼神と作さしめば、形体はわれ能くこれを賦し、知識はわれ能くこれを与ふも、この物にして物に非ず、形なきも形あるに似たるの態度に至りては、われ実にこれを変じこれを化し、その自づから無くして有り、また自づから有りて無からしむること能はざるなり。

ここで笠翁は、美人たる尤物を尤物たらしめる媚態、これについては要するに自分は全く説き明かすことができない、と言っているに過ぎない。ただ単にその「できない」ということを、さすがの自分もこの点においては天地鬼神の巧工の前に服さざるを得ぬ、たとい天地鬼神にされたとしてもどうのこうのと、あたかも自分が天地鬼神と対等互角の者であるかの如き口吻をもって、ああだこうだと言ひ回ってみせているから、それで可笑しみが誘発されるのである。すか

さずここを捉えた余澹心による眉批——

千古善く美人を状ぶる者、陳思王の『洛神』一賦に過ぐる莫し。輕雲月を蔽ひ、流風雪を廻らす、なほいまだ形容これに到らざるがごとし。笠翁は真に尤物なる哉！

古来美人を形容して最高傑作たる『洛神の賦』、あの優れたすばらしい詩的描写ですら笠翁のこの表現には及ばないようだ、と半疊を入れ、笠翁はまことに「尤物」だと驚嘆しておひひらかしているわけだ。ここで転用逆用した「尤物」とは、本来の意味である「特異なきわだつてすぐれた人物」を指す。「尤物」と言い「怪物」と言い、また「異人」と言い、いずれも普通一般尋常ならざる者であつて、そうした尋常ではない非常に特異な者が披瀝してみせる特異な「芸才」、それに対する「掛け声」がこれらの眉批なのである。

同様に本文中の用語を巧みに批文に逆用して「掛け声」としている例をもう一つだけ挙げてみよう。「習技第四・文芸」において笠翁は「女子の歌を善くする者、もし文義に通ぜば、みな詞余を作るを教ふべし」として、これを具体的に説き、「詞余すでに熟さば、即ち短きより長きにすべく、拈げて詞曲を為らば、その勢ひまた易し」と述べてのち、次のように言う。

果して能くかくの如くにて、その自ら制り自ら歌ふを聴かば、則ちこれ名士と佳人と合して一となり、千古来の韻事韻人は、いまだ此れに出づるもの有らず。われ、上界の神仙みづからその楽しみを鄙しみ、みな人寰に向つて諦せらるるを欲して之に就くを恐るなり。此の論は前人いまだ道はず、実に実に笠翁より創む。此れによりて妙境を得たる者あらば、切にその本づく所を忘るること勿かれ。

女をいかに楽しむかについては、その奥義を極め真髓に達しているのが笠翁であつた。みずからもそれを自負し、他

人もまた認めるところだったであろう。娑婆の人間にとって仙人こそは羨むべきものとなっているが、その「上界仙人」さえも羨むほどの楽しみがこれなのだ、オーバー得意気に言ってみせるところに、快樂主義者笠翁の真骨頂がある。それをまたヌケヌケと「此論前人未道、実実創自笠翁……」と大いに鼻高々で言っているのだから、そこでこの「掛け声」がある――

余澹心云く、世に此の福を享くる者あらば、ただ宜しく多く笠翁を叫ぶべし！

「待ってました、笠翁屋！」というわけであるが、この批文中の「多叫笠翁」ということばは、実は「居室部、房舎第一・取景在借」の初めに得意の笠翁節を鳴らしている箇所があって、そこでの用語を踏まえ逆用しているのである。

すなわち、窓をつくるにあたってのすばらしい特別の方法を、自分は私せず世人に公けにしたい。これによって果してよろこびたけなわの折には、声高らかに笠翁の名を叫んで（高叫笠翁数声）私の夢魂を呼びよせ、共にその楽しみに与らせていただきたい、と言っているのである。――この笠翁節を、評者余澹心は念頭に入れ下敷にして、先の「掛け声」を発しているわけであるから、その効果・巧みさもここで見逃されてはならぬであろう。

ついでに言うならば、余澹心はこの書『閒情偶寄』に尤展成と共に序文を書き、眉批を与えているだけではない。彼自身の纏足に関する蘊蓄を綴った「婦人鞋袜辨」と題する文章が「治服第三・鞋袜」の項に附載されているのであるから、この書物に対しては誰よりも格別深く関与していることになる。<sup>(6)</sup>これを言い換えれば、笠翁と共にこの書物（特に「声容部」）のなかで遊んでいるということなのである。とはいふものの余澹心は、尤展成も同じく、正統派の文人として名が通る「常人」であったし、自己認識としても当然そうであった。笠翁との差異がここにある。笠翁は正統派文人たり得ない「異人」「尤物」「怪物」であり、自己認識としてもまた当然そうであらざるを得なかった。異才異能の幫閑

文人として、その特殊な「芸才」を売り物にして生きて行かざるを得なかった笠翁の、他に比類ない独自の在り、ようがここにあり。彼の人と文学について考えるとき、これは外してはならない大事なポイントであろう。

#### 四

笠翁の「遊戯の筆」のあやつりようは、まことに巧妙かつ多彩である。まさに変幻自在と言つてよい。彼みずからが実はこれを指して「幻境の妙」と謂つていたのである。「選姿第一」総論の終末部において、有名な「巫山の夢」の故事を引合いに出してこれを下敷にしなが、みずからその重大な秘密の一端を明かしているものであつて、しかもそれが、まずこの「声容部」の冒頭において述べられている点に、ぜひ注目しておきたい。

すなわち、楚の襄王が大勢の宮女たちと歓楽を共にしたこと、それはあつたに違いないが、しかし「実事」としては伝えられていない、ただよく知られているのは「陽台一夢」のことだけだとする（陽台とは、懷王の夢のなかで神女が朝に晩に雲となり雨となつて巫山の南にある楼台のもとにいます、と語つたというその場所のこと）。しかしそれらの跡形はすべて考究しようがなく、「実事」としては記しようがない。つまりは「皆幻境也」と断じてのち、次のように述べて結んでいる。

幻境の妙は真に十倍す、故に千古これを伝ふ。よく真に十倍するの事を以て、譜して法を為らば、いまだ閒情三昧に入らざるもの有らず。凡そこの書を読むの人、学びし所の従来を考せんと欲せば、則ち請ふ、楚國陽台の事を以て対へんことを。

ここからも窺えるのは、やはり自分の都合のいいように理屈を運んでいつて問題を極めて曖昧にしてしまおうとする

論理の操り・弄びであるが、暗にはめかし言わんとしているのは要するにこういうことになる。——自分笠翁がこの書で述べんとする「閒情三昧」は、すべて「幻境の妙」なのであって、それらの由来はおよそ考究しようのない根も葉もないこと、従って「真・実」ではない「仮・虚」なのである。とは言うものの「真・実」の到底およぶところではない、それに「十倍する」ほどの価値あるものである。

すなわち、「虚事」をいかに「実事」以上の面白いものにするか、そこにおいて發揮される伎倆が「幻境の妙」なのであるということになる。笠翁がこの書物のなかで綴った「閒話」むだばなし、その目指すところがいわばそうした「幻境の妙」なのであった。「幻」とは、「詐惑なり。假なる者の真に似るとき之を幻と謂ふ」支那文を漢字典であるから、「幻境の妙」を指すとなると、当然のこととして「仮(偽物)」を「真(本物)」らしく見せかけて人を詐り惑わす(眩惑する)ためのありとあらゆる手段・テクニクが駆使されねばならぬことになる。すでに挙げてきた「根本説」やら「三法」等の例は、いずれもそうした笠翁の手の内の一端を明らかに示したものであった。

いずれにせよ、「虚」と「実」との両者を巧みにゴチャ混ぜにしてフザケてみせる戲謔精神、これを基調として発するところの笠翁独自の表現口吻の可笑しさ面白さにこそ、彼の「遊戯の筆」の妙縮がある。

「修容第二」の最終項「点染」での例を見てみよう。ここでは女性が脂粉を施す際の方法について説いており(この「点染」の語は本来画面に景物を配したり色づけしたりすることを謂う)、笠翁の観察眼の非凡さが窺えるが、これを特に画工が着色する際に、或いは煉瓦工が壁に石灰を塗る折の手順になぞらえて述べているところは、極めて詳細にわたる。まずその箇所に対して与えられた尤展成による眉批——「体験ここに至る、真に溫柔郷に老ゆる者なり」。

「溫柔郷」とは「色町遊里」や「ねや・閨房」のことで、また「色恋女色に沈溺している境地」をも指す。ここで評

者は、こと女性に關わる事柄についてこれほどまでに興味を注ぎ觀察體驗している笠翁の「異人異才」ぶりに對して、改めて「嘆声」を發してみせたわけだ。この「溫柔郷」という語も、本書中で笠翁がしばしば用いているのを逆用したのである。そしてこの項の結末部（ということはこの章の結びである）に至って、笠翁は例の得意とする口舌をふるってみせる。

凡そこの編を読む者、批閱し此に至らば、すなわち湖上の笠翁は原蠱物に非ず、風雅の功臣たるに止まらず、また紅裙（きんぐん）の知己と謂ふべきを知らん。初め面容の黒白を論じ、いまだ立説の敵に過ぐるを免れず。敵に過ぐるに非ざるなり、病を受くること実に深きを知り、しかる後に徳の人を医するや果して起死回生の力あるを知らしむるなり。みずからを指して「原非蠱物」と言い、また「風雅功臣」「紅裙知己」だとヌケヌケ言ってみせる。先には「曲中之老奴、歌中之黠婢（てい）」と稱し、或いはまた「談笑功臣、編摩志士（し）」とも稱しているのが併せて想起されるが、いずれにせよ自分自身を卑下してみせてひたすら低姿勢を装いながらも、その実どっこい、滅法「頭が高い」のである。

また、「面容の黒白を論じ」ること敵であったのは、実は「徳」に「起死回生の力あるを知らしむる」ためだったというところへ、スルスルと話をもつて行く可笑しさ。すなわち、この上なく立派な建前看板たる儒家思想が「徳」のもつ感化力を絶対化して主張する、そのところを逆手にとって、お先棒をかついでいるように見せかけながら、実はこれをすっかり茶にし、コケにしてみせているわけである。なぜならば「徳」の力の絶対化を、まさかと思われるくらい「起死回生」にまで、極端に拡大してみせたのであるから。

右に引続き、「これを含（ま）ぎ更に二説あり、みな此より浅きものなるも、然れどもまた知らざるべからざるなり」として次のように述べて締めくくっている。

面を勻かほふには必ずすべからく項くわを勻かほふべし。しからずんば前に白く後に黒く、戯場がたいの鬼臉ゆうらの如きあり。面を勻かほふには必ず眉を掠かするを記す。しからずんば霜花眼を覆ひ、幾ほんと春生の社婆しやば（女の白子）に類す。点唇てんしん（口紅をさす）の法に至りては、また面を勻かほふとあひ反す。一たび点くずれば即ち成り、始めて桜桃の体に類す。もし陸続増添し、二三それ手すれば、即ち長短寛窄の痕あり、これ成串しやうざいの桜桃を爲して、一粒に非ざるなり。

先に「徳」のもつ感化力を目いっぱい拡大してみせたように、話を大げさに極端にしてみせること、これが話を面白くする一つのコツであろう。「戯場之鬼臉」「春生之社婆」と言い、また「成串桜桃」と言い、いずれもまるでマンガ絵を見るような面白さがあるが、それほど極端になるまで化粧法を誤ることがホントにあり得るかどうか。——そうした表現は誇大そのもの、つまりはウソなのである。少なくとも甚だもってウソッぽい。ところが「遊び」には、そもそもいつだってウソがつきものなのだ。と同時に、バカバカしさみたいなものだってつきまとう。そのウソやらバカバカしさやらを寛大に許容し、それらを逆にいかに巧みに運用して「面白く」してみせるかということがあって、初めて遊びの世界が成立することにもなる。笠翁はまさしくそうした遊びの世界に、実にしたたかに遊んでみせているのである。これもまた、彼みずから謂うところの「幻境の妙」ということになるであろう。

## 五

右に挙げた例は「修容第二」の結末部分であった。次には同じ章の初めにある総論部分を見てみよう。

ここでは、「楚王細腰を好めば、宮中皆餓死す」という歴史故事をもち出して、これがいかに馬鹿げた風俗であったかを指摘する。がそれは結局、楚王の好みの過ちではなく、また宮女たちの過ちでもない。そうした風俗自体をしっかりと

咎め立てして著述する者が一人もいなかったことの過ちなのだとして（これもまた、「我田引水」的な理屈運びだ）、次のように言う。

吾れ今日の修容を觀るに、大いに楚宮の末俗に類するも、著して章程を為るは、草野（野人・微賤の者）の爲すを得るの事に非ず。ただ人の提破し、愛すべからずして憎むべきを知り、その日に趨りて日に甚だしきを聴かしむることを經ずんば、則ち生に在りて魍魅魍魎たる者、すでに死人を去ること遠からず。矧んや腰は一縷を成し、餓ゑて死を必するの勢ひ有るをや！ われ修容の爲に説を立つるは、実に此の段の婆心を具ふ。およそ西子たる者、自らまさに曲に人情を休すべく、万遽かに嬌かしき嗔りを発して、その唐突を罪むること母れ。

要するに、われ笠翁こそは今の世の風俗の乱れに対して「章程」をつくらんとする者であり、そのために「修容」の説を立てるのである、ということ为例の得意の笠翁節をもって言い回ってみせているわけである。ところがこれが、およそまやかしの虚言であることは、以下項を追って實際に確かめてみるまでもない。ここでは例えば「非草野得爲之事」とへりくだってみせたり、「魍魅魍魎」がどうのとオーバーに言い立ててみたり、また「実具此段婆心」と昂ぶってみせたりした果てが、諧謔の語をもって結びとしている、そうした笠翁の戯れっぷりが見所・見せ所であらう。ここでの「掛け声」――

尤展成云く、知らざる者は以て嘲風嘯月の書と爲す、烏んぞ移風易俗の書たるを知らんや！

「嘲風嘯月」はいわゆる花鳥風月の遊びを指し、戯れに作った詩文をそしる言葉。すなわち、世の中の物知らずの輩はこれを下らん嘲風嘯月の書だという。今の世の悪しき風俗を移し易えんとする立派な啓蒙書であることが、なんと連中にはわかっていないのである！――笠翁が弄する戯謔の尻馬にすっぽり乗っかって、「そうだ全くその通り！」とさ

らに一層の拍車をかけているのである。

ということは取りも直さず、この書がまぎれもなく「嘲風嘯月之書」であるということが、文人仲間たちにとってはもはや当然言わずもがなの認識だったということである。ただ、まじめ、一辺倒の儒教が唯一正統の国家思想として絶対化されている以上、戯れ文を弄する側にしてみれば、そうしたまじめの建前原則から全くはずれて「嘲風嘯月」の遊びをするわけにはいかなかった。そこではそうした「まじめの常識」を逆手に取りダシに使い、それに引掛けたり絡めたりして、実は自分の都合のいいように勝手なクダを捲きゴタクを並べて遊んでみせるという、手の込んだ操作が必要となる。<sup>(9)</sup>ここでは「移風易俗」というまじめを逆手に取り、これに引掛けて戯れているわけだ。その「戯れ」が感取できない読み手であれば、すなわち相手の術中にすんなり嵌まり込み、これを「移風易俗の書と爲す」というトンチンカンをおかすことになってしまふのである。

もう一つの他の例を挙げてみよう。経書のなかの言葉をダシに使って戯れてみせるのが笠翁常套の手であるが、「治服第三」総論においては「富は屋を潤し、徳は身を潤す」(『大学』)を引合いに出し、例によって独自の論議を展開するすなわち、富者の住居はうわべが立派である必要はなく、粗末な家屋であっても自ずと「旺んな氣」が感ぜられるもので、それが「潤」の字の解である。逆に落ちぶれた者の家は、昔のままの構えであっても「冷氣」が感ぜられるものだと、次のように言う。

従来『大学』を読む者いまだその解を得ず、積すに雕鏤粉藻の義を以てす。果してその言の如くんば、則ち富人はその旧居を捨て、<sup>す</sup>別に新居を<sup>べつ</sup>覓めて如ふるに雕鏤粉藻を以てするなり。則ち有徳の人も亦まさにその旧身を棄て、<sup>また</sup>別に新身に易へ、しかる後にこれを心広く体<sup>わた</sup>胖かすと謂はんとするか。甚だしき<sup>かな</sup>矣、読書の難きこと。而して章句訓

詰の学は易事に非ざるなり。

これが譬喩の悪用をも含めた揚げ足とり論法のふざけた屁理屈であることくらい、笠翁自身がわかっていない筈がない。つまりそんなことは先刻百も承知の上で殊さら理屈論理をひねくり回して遊んでみせ、読者を面白がらせ楽しませんとしているのである。

だからここで、そうした笠翁の手の内をとうに見透している尤展成は「書を説きて頤を解く、『大学衍義』を補ふべし」——思わず大笑いさせられるご立派な説、かの『大学衍義』（宋・真徳秀撰、四十三卷）の不足を補うものだ、とタイミング外さずに余裕綽々の半疊を入れていくわけだ。ここで、笠翁を大まじめに解釈する人は、尤展成が本気で笠翁の説を『大学衍義』を補うものだと思っていた、と思うのであろうか。とすれば「頤を解く」とはどういう意味なのか、『大学衍義』の性格はどういうことになるのだろうか。それとも尤展成を、『大学衍義』の文と笠翁の文の性格の違いすら解することができぬほどの無知無学の輩だと思ふのだろうか。伺ってみたいものである。

笠翁は右に読けてさらにこう言つて総論を結んでいる。

われ嘗て此の論を以てこれを説の部に見し、今また叙で閒情に入れたり。噫、此れ等の詮解、豈に閒情を好み小説を作す者のよく道ふ所ならんや。偶々寄する云爾。

まず「以此論見之説部」と言っているが、文集卷二の「説部」には「名諸子説」一篇を収めるだけである。実は「二樓」のなかの小説「生我樓」第一回到この論をそのまま用いているのであるから、「説部」というのは「小説」を指していることになる。まことにうさん臭い、というよりもまやかしの言なのだ。さらにいうところの「此等詮解」がすでに述べたように戯れなのだから、「豈好閒情、作小説者所能道哉」と言っているのが、ひどくふざけた可笑しい草だ

ということにならざるを得ない。つまり「閒情を好み小説を作す」底の輩が、こんな立派な「詮解」を説くことができるものであろうか、と卑下し謙りながらも横柄にふんぞり返ってみせている戯譚なのである。

右に示したのが「治服第三」の総論である。「選姿第一」「修容第三」のそれについては本稿中すでに述べた。残りの「習技第四」の総論はどうかといえ、これまたご多分に漏れず「遊戯の筆」であって、それは例えば尤展成と余澹心が三ヶ所にわたって熱心な「掛け声」をかけているところから見ても、すでにある程度察しがつく。全四章の各総論がすべて「戯れ」の筆づかいに成るといことは、これがそのまま「声容部」全体の基調を示しているということである。またすでに述べたところであるが、この部の冒頭「選姿第一」総論において「幻境の妙」について説いていたことも、極めて示唆的で意味深長なのである。

次にはその「習技第四」総論の結末部分だけを挙げてみる。

われ習技を談じて女工（裁縫・刺繡）に及ばざるは、描鸞刺鳳の事は閨閣の人人みな曉り、予が越俎（己れの分を越える）の談を爲すを俟つこと無きを以てなり。その女工に及ばず、しかも仍ほその事を鄭重し、敢へて竟に遺さざるは、後世逐末（末利追求の商業を営む）の門を開き、紡績蚕繰を講ぜざるに置くを慮るなり。閒情を説くと雖も、大道を傷くる無きは、これ立言を爲せるの初意爾。

この章で取り挙げたのは「文芸」「絲竹」「歌舞」の三項であった。「女工」については右の文章の前で簡略に例の戯譚口調をもって述べるに止めたことへの言い訳をしてみせているのであるが、簡単なながらも触れておいた理由、それは「慮開後世逐末之門、置紡績蚕繰於不講也」だと言う。そのご大層なまじめぶった言い草に可笑し味を感取できるかどうか問題であろう。さらにまた「雖説閒情、無傷大道」と言っているのも、およそ何の益体もない「閑話」が「大

「道」を傷つけたりなんぞするはずもわけもないところを、殊さらに取り立ててこう言ってみせるから、それでコッケイになるのである。

また例えば、女性の髪飾りには宝石を用いるよりも髪をもつてした方がよいのだという理屈を、ひとしきりこねた後では、「われ豈に能く高世（世俗を超越する）の論を爲さざらんや。その人情に裨する無きを慮る耳」と言う（「治服第三・首飾」）。これも全く同様であつて、表面上はこういう理屈による恰好を付けてまじめ、ぶり正人君子ぶつてみせるというのが、その「嘲風嘯月」の大きな特色なのである。そうしたまじめ、ぶりよう・恰好の付けように、可笑しみ面白みを感じ取ることができるかがポイントなのだ。ここでは、自分の言説が「人情に裨する」ものであるというところをタテに取り、「高世之論」だつて為すことお茶の子さいさいなのだ……、と実に奇妙な持つて回つた言い方をしてみせる。

つまり筆者笠翁にしてみれば、相手をつねにケムに捲き眩惑しようとして、煙幕を張つたり迷彩を施そうとしたりする。だからその筆にかかる文章は、一言もつてこれを蔽えば、いつでも非常に「うさん臭い」。そしてそうしたうさん臭さのもつ面白さこそ、実は笠翁が故意に意識的に狙うところであつた。そこで例えば、次のような用意周到の弁解めいた言辭を弄してみせることだつて出来るわけだ。

予を詰る者は曰はん、すでに態度の爲に立言するも、又人に指すに法を以てせず、終に首鼠（どっちつかずの曖昧）を覺ゆ、なんぞまた精を捨て粗を言ひ、女を相する者に略示するに意を以てせざるや、と。予は曰はん、已むを得ずして言を爲し、ただ所見を直書するありて、聊か榜様（てほん）を爲りたるのみ、と。（「選姿第一・態度」）

これも笠翁が、本気まじめに然るべき弁解をしようとしているわけではさらさらない。至る所でさんざつぱらひどく手の込んだイカガワしい言説を振り回しておきながら、「ただ所見を率直に著して（止有直書所見）……」などと言うか

ら、フザケているということになるのである。問題は読み手の側が、まずそうしたフザケ気分やうさん臭さを感じると同時に、それを面白がることができるかどうかということなのである。もしもここでその“弁解”を、なるほど至極もつとだど納得してしまふ読者がいたとすれば、これまた笠翁の思うツボなのだ。こういう戯れ文を弄することができる人物というのは、どこまでも厄介で一筋縄ではいかぬクセモノなのである。

以上述べてきたように、この「声容部」は“異人・尤物・怪物”たる笠翁が、まさしくそう呼ばれるに足る異才異能ぶりを十二分に発揮して“遊戯の筆”をふるってみせたものであった。そこにおいて彼が描き出した“幻境の妙”を、評者たちと全く同様の“感覚”をもって面白がり楽しむことができなければ、この書の真の読者たり得ないということなのである。

「声容部」に続く他の部分についても、やはり同様のことが言えるのであるが、それらはまた別に改めて見ていくことにしたい。

#### 注

- (1) 「與劉使君書」(『笠翁文集』卷三)のなかに、「惟閒情偶寄一種、其新人耳目、較他刻爲尤甚。昨經面訊、答云未見。今特自他友處索來、請自第六卷聲容部閱起、可破旅次中十日岑寂。其一卷至五卷、則單論填詞一道、猶爲可緩、俟終篇後、補閱何如」とある。伊藤漱平氏「李漁の戯曲小説の成立とその刊刻」補正(『二松』第二集)の注(83)にもこの部分の引用がある。
- (2) 『支那文学大綱・卷三』(大日本図書株式会社・明治三十年)一七一頁。
- (3) 黄麗貞氏『李漁研究』(純文学出版社・一九七四年)には「笠翁女性観」という章を立て「声容部」を六頁にわたって詳しく紹

介しているが、その叙述は笠翁の言説をことごとく真に受けたものである。顔天佑氏『閒情偶寄』（時報文化出版・一九八五年）では、序文においてこの部は「立論較爲狹隘、觀點也不盡合今日、便大膽地將它“割愛”不寫了、這是必須先作說明的」と断わって省略しているが、同書が大まじめな「観点」に立つものであるという点では、前掲書と何ら変りない。

(4) これについては拙稿『李漁評価に関する考察』（『藝文研究』第五十四号）一二七頁以下に詳述した。

(5) 『洛神賦』原文：「髣髴兮若輕雲蔽月、飄飄兮若流風迴雪」。

(6) この余懷の文章に対しては、笠翁自身が眉批を附しているのも注目される。

(7) 『演習部・授曲第三』前稿（『閒情偶寄』考（一）九二頁参照）。

(8) 『與陳学山少宰書』。編摩は編輯に同じ。笠翁には『尺牘初徵』『尺牘二徵』『四六初徵』『新四六初徵』『笠翁詩韻』『笠翁詞韻』『資治新書初集・二集』『古今尺牘大全』ほか多くの編輯書があった。いずれも「工具書」の類である。

(9) 注（4）拙稿第四章参照。